

三里塚・ジェット闘争貫徹ノ「国鉄35万人体制」粉碎ノ

革マル・スパイ分子 権力・当局の手引者 嶋田誠を糾弾する



81.6.25
No.774

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五ノ六(公衆電話)二七二〇七

『6.12事件』デッチ上げの張本人 転び屋嶋田誠の本性を暴く(その3)

動労「本部」によるわが動労千葉にたいする告訴・告発が、動労千葉一三〇〇を権力に売り渡し組織破壊をするための手段をえらばぬデッチ上げにもとづくものであることは、日がたつにつれますます鮮明になっていく。いまや動労「本部」は、権力合体組合になりさがり鉄労以下の組合に変質させられようとしているのだ。これを率先して行い張本人こそ動労革マル分子であり転び屋・嶋田誠である。本号では「六・一二暴行事件」なるデッチ上げの張本人、転び屋・嶋田誠が動労千葉破壊のために数かぎりない裏切り・敵対を行ってきた諸事実を列挙し、嶋田誠の本性を暴くことをもって「転び」「デッチ上げ」「タレコミ告訴」の必然性を明らかにする。

「東洋大卒革マル」の活動歴を 隠して津田沼に潜入

嶋田誠は一九七四年三月(当時二六才)東洋大革マルの活動歴を隠し、高校卒と偽り津田沼電車区に臨雇として就職した。七五・七六年と年月がたつにつれて「本部」革マル分子との組織運営をめぐる組織内対立が激しくなるにつれて、いよいよ革マルの本性を隠しつつ津田沼支部破壊を隠然と開始したのである。

その手口たるや、嶋田誠は検修職場内で検修分科副会長の役職を利用して津田沼支部執行部は中核派だとデマを吹きこみ反執行部グループを検修内に少数で形成し、七七春闘スト破りを行ったのである。このスト破りを自己批判したまではよいが、一方では、社青同協会派に潜入し革マル隠しを行い、七八年十月には国労青年部中央委員選挙に介入し、国労との共闘体制をブチ壊す策動を行ったのである。この悪業について二度目の自己批判を行いその舌の根もかわかぬうちに、「支部に迷惑をかけた」として一方的に支部に脱退届を出し国労分会に加入届を提出したのである。支部・分会に受け入れられないとみるや、支部の説得活動から逃げまわり、組合費納入を十一月から翌年三月まで拒否し、「俺は組合費を納入していないから自然脱退だ」と職場でふれ歩き、裏切り分子・野口・板倉・小野・佐藤等をまきこんで「本部」革マル分子の千葉排除策動に抗して闘う動労千葉の闘いを内部から破壊せんとしたのである。

四・一七津田沼襲撃の手引き者

嶋田誠の最大の悪業は、片岡津田沼支部長を頭がい骨骨折に至らしめた、権力のヒ護のもとに挙行された「本部」革マル分子による四・一七津田沼襲撃の手引き者であるということだ。嶋田は、四・一七直後「ヤラレタのは当然だ」と国労組合員に語り四・一七を賛美していたのだ。しかし津田沼支部組合員の四・一七にたいするあ

まりにも大きな怒りの声に接するや否や嶋田は、従来までとつたすべての行為を自己批判(三度目)したのである。こうして嶋田は、動労千葉津田沼支部結成に至るまで三度にわたって自己批判をしながら、七九年八月、革マルスパイ分子の本性を露わにして、撃動労熊本大会に「良心的千葉組合員」という仮面をかぶって出席したのである。

当局に防衛要請を哀願

嶋田は動労千葉内部に潜入し、動労千葉破壊に失敗するや、「本部」革マル分子と口をそろえて「津田沼の職場管理体制を強化しろ」「勤務を厳正にしろ」「三項八号を適用しろ」「処分しろ」等と当局に申し入れ、動労千葉が国労共闘で闘ってきた職場慣行破壊を画策するという挙に出たのである。

この鉄労・マル生分子とまったく同じ裏切りタレコミ行為にたいして職場の怒りが集中するや否や嶋田は、当局に防衛方を要求し以後こんちま一年九ヶ月当局職制を検修職場に常駐させ動労千葉・国労組合員を看視させているのである。これだけで安心できぬ嶋田は過去一貫して口を開けば「船橋警察に訴えてやる」と挑発的言辞をつねづね職場で叫んでいたののである。

以上は転び屋・革マル分子嶋田誠の数ある悪業のほんの一部である。このような卑劣漢・階級的良心をなげすめた権力合体分子嶋田誠であればこそ、「本部」革マル分子が転び屋に仕立てあげて「六・一二暴行事件」デッチ上げ・タレコミ告訴を行うことができたのである。

われわれは、転び屋・タレコミ分子嶋田誠をつかたデッチ上げ告訴に動労千葉破壊攻撃に総力で反撃しよう。

6月26日17時半、於津田沼電車区
6.26反弾圧総決起集会へ！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊を粉砕せよ！